
ラブトレ！？

千景

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブトレ！？

【Nコード】

N2312Y

【作者名】

千景

【あらすじ】

恋ってなんですか？好きってなんですか？とことん恋愛に興味のない私。

そんな私に、幼馴染のトモカが必死に諭しにやってくる。

恋愛しないなんて人生の半分は損しているぞといわれるけれど、理解できないんだから仕方がないよね？トモカの説得はたして聞き入れられるのか？少しでも恋に興味を持てるようになるのか？どうなるこの先？

1 恋愛未経験ですが、何か問題でも？

恋って、何ですか？

好きって、何ですか？

誰かがカッコイイだとか、彼氏がどうしたとか、周りは恋愛に大忙しだけど、全くもって興味が無い。

女を捨てているとか、そんなわけあるか、いろいろ言われたりするけれど、ホントなんだから仕方がない。

そういう人間もいるんですけどお話。

「いらしゃいませ〜」

「いらっしゃいました〜。元気にしてたか〜チカ」

いつもの曜日、いつもの時間。コンビニのアルバイトにせいを出していると、幼馴染の腐れ縁、トモカが現れた。

「また来たのか。トモ、暇だね〜」

「なんだよ、そう嫌そうな面は。客だぞお、あたしは」

「ちっ、顔に出してしまったか。まだまだだな私も。精進せねば」

と顔をペチペチと叩いて見せる。

「あ、お前、本当に嫌がってやがるな。失礼なヤツだ。あたしのこゝと嫌いになったんか？」

「いいえ、大好きですよ？お友達よ。幼稚園からのお付き合いじゃないですか。かれこれ、16年。何をいまさら嫌う事がありますよっか」

「嘘だ。そのわざとらしい、しゃべり方は何だ。こら」

「むむっ、またもバレたか。やるなお主。100点をやろう。すみ

ません。嫌いじゃないけど、最近うざいです。「ごめんね？」

と、首を傾げてみせる。

「そこで、正直に言われても困るんだけど……」

あ、トモの奴少し落ち込んだ。

「だってさ……」

「で、彼氏できたか？チカ」

相変わらず立ち直りの早い奴だ。

何だったんだ、さっきのしょげた顔は。

「それだよ私がうざいと思っているのは、3日前にも言ったけど、作る気ないし、興味もないね。いい加減わかれ？」

「心配してやってんだっ！こんなにやるっ！絶対人生の半分は損してるって！」

「へっへーん。余計なお世話です」。私は一生独りで生きるんです。独りでおかしく楽しく人生を送る自信あるしね」

べらぼうに働いて、年いったら、ネコでも飼って引きこもり生活を始めるのだ。

これが今のところの私の願望。マジで。

「お前、また、引きこもり生活するんだとか、思っただろ。今。一体何が楽しいんだ」

「ずっと家の中で好きな本を読み続けて、好きな時にご飯を食べて、また本を読んで…活字中毒者には、たまらんね。素敵な毎日になるね」

「本好きでも。アウトドアな人間はいつぱいいると思うぞ。そんなの言ってるのはチカぐらいだ」

「そっかな。そうは思わないけどね、あ、いつらしゃいませ」

いかんいかん。つい話し込んでしまった。ふと見ると、お客がトモの後ろに並んでいた。

「トモ、どきたまえ。お客さんだ」

「あつあくん？あたしは今、こいつと大切な話をしてんだ。邪魔しに来るとは、いい度胸じゃねえか。出直してきな。ガキがっ」

トモは後ろを振り向き、ガンを飛ばす。

いたいけな女子中学生が、バタバタと逃げてった。

「おい、こら。何、営業妨害してくれてんだ。訴えるぞ。こんなところで元ヤン発揮するなよ。一応旦那も子供もいる主婦してんだろ」

「あたしはっ、あんたに幸せになってもらいたいの！いくら幼馴染でも、グレて、いろんな悪さしてきたあたしと、ずっと変わらさず付き合ってくれたのはあんただけだったから！結婚して、子供もできて、あたしは今すごく幸せなんだ。チカとそんな幸せを分かち合いたいんだ！」

「ノーサンキュー。そんなのに幸せを感じない私にとって、ゴミと一緒にだね。まとめてゴミ箱にポイっだ。別のことだったらいくらでも分かち合ってやるぞ。だいたい幸せなんてものは人それぞれだからな。っーわけだ、仕事の邪魔をするんだったら、帰れ」

シッシツと手で追いやる。

店長がこっちに睨みをきかせていた。やべえやべえ。

「ばーかばーかつ。また来るからなっ、あたしはあきらめないぞっ、あんたに男作るんだっ！絶対だかんなっ」

思いつきり舌を出して、あっかんべーをしながら去っていくトモ。子供かお前は。

「あきらめないからなああああ……」

自動ドアの向こうでまだ言っている。

叫びながらのフェイドアウト。

一回グレたわりには寂しがり屋なトモさん。なんでも私と一緒にがいいというところは昔からちっとも変わらない。

自分が結婚したもんだから、私にも結婚してもらって、お揃いになりたいだけなのだ。あいつは。

本日のトモの襲来もかわすことができけど、これからどうなることやら。先が思いやられる次第であります。

トレーニングつか？マジですか？

只今、図書館に潜伏中。

本日、日曜日。

無性に文章に触れたくて、バイトをさぼり、朝から本を読みあさっている次第であります。

雑誌、ライトノベルに始まって、ミステリーに時代小説、海外文学、息抜きに百科事典ときたもんだ。

ああ、楽しいなあ。まさに至福の時。好きなだけ本が読めるなんて、とても充実した1日になりそうだ。

トモの奴、まさか私がバイトを休んで、こんなところにいるとは思うまい。

バイト先にあきもせず、毎回毎回同じ話をしにやって来られるのが、うざすぎて、正直限界ギリギリだった。

こんな時のストレス発散は読書に限るね。

ああ、ここが自分の家だったらいいのになあ。

あー、ひここもりてえ。

「チカみつけ。やっぱり、ここかあ」

幸せの時をかみしめていると、まさかのトモ力登場に愕然とする私。

「なぜだっ。なぜ、いとも簡単に私の居場所がわかったのだ!」

ああっ、と私は頭を抱えて見せた。

「なぜって……大学が休みの日に、自宅とバイト先にいなかったら、ここしかねえし。あんた、本当に出不精じゃん。無理やり外連れ出さないと、どこも行かないだろ。本屋か図書館以外は」

「ぬぬっ、さすが幼馴染。私の行動を読むとはっ」

「読んでないっっーの。誰でもわかるわ。行動範囲狭すぎ……で、何読んでんの?」

とあきれた顔をしながら、机の上に並べられた本をのぞきんだトモは、何故だか固まってしまった。

「ん?あ、これ?今ね〜休憩タイムだから、広辞苑読んでんの。なかなか楽しいよ?辞書ってものはさ。トモ、あんたも読むかね?」

「読まんわっ!てうーかつ辞書読んでる時点で休憩じゃないしっ、そんでもって恋愛小説1つも置いてないじゃん?こらっ!」

両手をガバッと振り上げるトモさん。

まるでちゃぶ台でもひっくり返さんばかりの勢いだな。おい。

「恋愛小説だけは、苦手なんだよ〜。食わず嫌いの私でも、これだけはねえ。脳が受け付けないんだなこれが。不思議だね。性分だね。運命だね。だから、あきらめて?トモ?」

どうせ言うことが分かっていたから、先に断わってみた。

「誰があきらめるかあああああああつ、ぶわああかつ！」

トモ様ご乱心。

積み上げてあった本を本当にひっくり返しやがりました。

「恋愛小説読もうぜっ！、そして男作れようっ！頼むからさあああ！」

図書館利用者達の視線が痛い。

軽くデジャビュ。

図書館で騒ぐようなマナー違反は鉄拳制裁だ。

「トモ！ストロップ！！！」

皆を代表して脳天に思いっきり、ゲンソコを1発くれてやる。
衝撃に、トモカは一時停止。
ふしゆくと魂の抜ける音が聞こえた気がした。

今である。

「皆様、大変失礼いたしましたっ！狼藉者は成敗いたしました！連れて帰りますので、ご安心を！ではっ！」

魂の抜けたトモをズルズルと引きずり、出口へと向かう。

なにやらぶつぶつと、つぶやいているけれど、とりあえず無視。

その横に、ちみつ子がパタパタとついてきた。

「ママ、どうしたの〜?」

「マー君。来てたのかい?」

「ママは?」

「ママはね、今お昼寝中だから、そつとしいてあげてね、マー君」

「は〜い」

そう言うところこりとほほ笑んで、片手をあげて見せる。
うい奴。母に似ず、とても素直ないい子である。

それに引きかえ、トモの奴、私の幸せのひと時を台無しにしてく
れて、どうしてくれようか。

「……何だよう、何でなんだよう」

ぼそりとトモがつぶやく。

「何でって……」

「何で、そんなに彼氏を作るのが嫌なんだよう」

「……」

だから理由を問われても困るのだ。

具体的な理由なんて、自分でもわからないんだからさ。

ただ、時期じゃないというか、色恋沙汰は苦手なんだというか、もうそれしかないのだ。

そう、例えるなら、数学で何が分からないのかが分からない、みたいなの。

そんな感じ。

「ホントにホントにだめ？」

だめだなあ。つか。起きてるんだっつたら、自分で歩け？
何でまだ引きずられてるんだ。

「好みのタイプとか、ないわけ？」

う。思いつかない。

「んじゃさ、好きな芸能人は？」

え。つと、……いないわけじゃいけど、名前知らねえな。

誰だっけ、あの映画に出てた人。忍者の役したり、バンドマンだったり、最近パパ役してたかな。

「中学、高校で好きな人とか……」

いるわけねえじゃん。

「……初恋とか」

そりは大丈夫なのらっ！
さすがに経験済みだよっ！

やっと、まともに見える事できそうで少し安心する私。

「いつ？誰？聞いてもいい？」

「えっと、幼稚園の時にとなりに住んでた、おじいちゃん」

「はっ？おじい……？」

「いつも、飴とか、おやつくれるから、大好きだったんだなあ」

「……ちよっ」

「今思えば、あれは恋だね。手作りのきびだんごとかさあ、絶品だったんだよ」

ウキウキして話していると、どす黒いオーラが漂い始めた。

あの、トモカさんや？どうしたのかな？

「ふ……」

「ふ？」

「ふざけんなあああああああ！」

トモは私の手を振りほどき、勢いよく立ちあがった。

トモカ様ご乱心その2。

「さっきから何だっ！好きな人はいねーわ、名前覚えてねーわ、あ

げくに、じじいだと！？そんなの初恋じゃねえ、ただ単に餌付けされてただけだろうが！！ああっ？」

おーい。巻き舌になっておりますぞ。

子供の前だぞ〜。

「……だ」

「え、何？」

つなるように声を出さないで出さないでほしい。怖いんですけど。聞き取りにくいしさっ。

「……だっつてんだ」

「だから、何！？聞こえるように言っつてよ」

「特訓だっつってんだあああああああ！！」

ビシッと指を突き付け、大声で叫んだ。

それを見て、マー君は何故か喜んでる。

「もっと、恋愛に興味もつように、鍛えてやんから、覚悟しとけっ

「！」

「えっ………？」

トレーニングですか？

マジですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2312y/>

ラブトレ! ?

2011年11月5日02時06分発行